

十五 讃岐の石材

地下資源の鉱物となると――それを掘出す鉱山は残念ながら一つもない讃岐だが、石材となると、その採石場は多くて、全国でも有数の山地であろう。

大阪の築城に小豆島の石が運ばれたり、皇居の新ご殿の造営に由良石が積み出されたことなどはよく知られているが、そんなことだけではない。讃岐の石というものは、上古の昔から遠く都の方によく積出されていた歴史的な事実もあるのだ。

「泉州誌」によると、

摂津長柄豊崎宮に都した孝徳天皇（大化改新）が河内国古市郡の白鳥陵（日本武尊をまつる）に伊岐宮（いきのみや）を造営したが、その造営に讃岐から石材を運ばせたとある。

また、泉州志に引用した、「泉州大鳥神社流記」によると、この時の讃岐の石は、泉州大鳥郡石津に陸揚げして、一時そこに置かせた。石津の名も、実は讃岐から

の石材を入津していたことから起っているような説明になっている。

河内の白鳥陵といえは、讃岐にも白鳥神社があり、ともに日本武尊にちなむ因縁の地である。その河内の白鳥陵に造営した日本武尊の神殿―伊岐宮に讃岐の石を運ばせたというわけなのだ。

また、日本の正史である三代実録には、陽成天皇の元慶元年（八七七）都の大極殿造営に当って、讃岐の国人の民徭（みんよう）―労力奉仕する一種の課役―として讃岐の石を平安の都まで運ばせたことが記されている。

このように讃岐の石は、遠く都の方にまで運ばれて、建設資材に利用された古い歴史を持っている。ただ残念ながら、今のところ讃岐のどこの石か―どんな石か―それがわからない。遠く積み出されていた讃岐の石の歴史は古いのだ。

十六 和泉石

誰もが、つい気にもとめないで、うかつに眺めている、川原の礫や、讃岐平地で、